「儿化現象」を支配する音韻規則および制約
―― 生成音韻論の観点より解釈の試み ――

呂　　麗　敏

1．はじめに

「儿化現象」に関する解釈は，ここで幾つかの教科書での記述を引用することにする。

儿化音

単母音〈er〉は，ときには他の母音と結合して儿化母音となる。“－儿（－r）”

但し，〈r〉の前のn，ngと重母音のiは発音しない。

huàr	wánr	nǎr	yìdiǎnr
画儿	玩儿	哪儿	一点儿

『新版・1年生のコミュニケーション中国語』
塚本慶一監修・劉穎著　白水社　2001年3月　P 9

語尾の捲舌音化

捲舌母音「er」が接尾語として他の音節につく時，捲舌しやすくするため，捲舌音化（儿化érhuà）現象が起きる。その時，音の変化や脱落のことがあるが，つづりにそのまま残る。

“儿化”音の発音は次のようにすればよい。

1．-a・-o・-e・-u＋r　→　変化なし

nàr	dòur
哪儿（そこ、あそこ）	豆儿（豆）

2．-ai・-ei・-an・-en＋r　→　i・nが脱落

xiǎoháir	běnr
小孩儿（子供）→　xiǎohár	本儿（ノート）→　běr

3．-ng＋r　→　ng が脱落

　　k ò ngr

　　空儿（暇）→　k ò r

4．（単母音 - i）・- ü ＋r　→　e〔ə〕の音を挿入

　gu ǒ p i r　　y ú r

　果皮儿（果物の皮）→　gu ǒ piér　　鱼儿（魚）→　yuér

5．-in・- ü n・-un・-ui＋r　→　n・i が脱落、e〔ə〕を挿入

　　ji ǎ oy ì nr　　q ì shuǐr

　　脚印儿（足あと）→ji ǎ oyi è r　　汽水儿（サイダー）→q ì shu ě r

6．（特別母音 -i）＋r　→　i をe〔ə〕に変える

　sh ì r　　c i r

　事儿（こと）→　sh è r　　词儿（単語）→　cér

『新中国一星期 — 中国語初級テキスト』羅奇祥著
三修社　2001年２月　P13

アル化（儿化）	綴り				実際の発音
1) -a,-o,-e,-u,＋r	马 m ǎ	→	马儿 m ǎ r	→	m ǎ r
	歌 g ē	→	歌儿 g ē r	→	g ē r
2) i, ü＋r	鸡 j ī	→	鸡儿 jī r	→	ji ě r
	鱼 y ú	→	鱼儿 y ú r	→	yu é r
3) -ai, ei,-an,-en,＋r	盖 g à i	→	盖儿 g à ir	→	g à r
	玩 w à n	→	玩儿 w à nr	→	w à r
4) in, ün＋r	心 x ī n	→	心儿 x ī nr	→	x ī r
	裙 q ú n	→	裙儿 q ú nr	→	qu é r
5) ng＋r	影 y ǐ ng	→	影儿 y ǐ ngr	→	y ǐ ngr
	空 k ò ng	→	空儿 k ò ngr	→	k ǒ ngr
			＊母音の上の～は鼻音化を表す		

6) zh,ch,sh,r,z,c,s, の後の i＋r

	事 sh ì	→	事儿 sh ì r	→	sh è r
	刺 c ì	→	刺儿 c ì r	→	c è r

『中国語入門ポイント45』山下輝彦　三修社
1999年２月第１版　2001年２月第12版　P９

「儿化現象」について，『新版・1年生のコミュニケーション中国語』，『新中国一星期—中国語初級テキスト』と『中国語入門ポイント45』には，それぞれの取り扱い方について検討してみると。

「er」に関して『新版・1年生のコミュニケーション中国語』が「単母音」と称し，『新中国一星期 — 中国語初級テキスト』が「捲舌母音」と称している。要するに「er」は「母音」であるところで二教科書が同一視している。これに対して，「er」は「母音」であるか否かについて『中国語入門ポイント45』には言及していない。

が，『新版・1年生のコミュニケーション中国語』および『新中国一星期—中国語初級テキスト』には，「単母音〈er〉は，ときには他の母音と結合して儿化母音となる。」，および，「捲舌母音「er」が接尾語として他の音節につく時，捲舌しやすくするため，捲舌音化（儿化érhuà）現象が起きる。」という認識であって，『中国語入門ポイント45』にも「儿化」形成するのに相当する6項目で「+r」という過程を示している。即ち，「儿化現象」形成のプロセスにおいて三教科書が一致を呈している。

そして，本稿ではまず，「儿化現象」において「er」は「母音」であるか否か，およびその形成プロセスについて，議論を踏むことに出発点として，その上で当該現象の音韻派生（phonological derivation）という過程における音韻規則および制約を考察する。

2.「er」と「儿」

『中国語音声学概論』（松本丁俊著　白帝社　1986年　P112）には，「儿化現象」について以下のように述べている。

儿化韻

儿化韻とは巻舌韻母erを，他の韻母のあとにつけて，その韻母が巻舌させることをいう。この様な語音の変化を儿化（アール化）というが，声母のrと違うことに注意。

「儿化現象」について，前述の『新版・1年生のコミュニケーション中国語』，『新中国一星期 — 中国語初級テキスト』および『中国語入門ポイント

45』がこの流れを汲んでいることを一目瞭然だといえる。

果たして「er」は「母音」であるかどうか，およびその形成プロセスについて，議論する余地があるか否か，本節では2.1でおよび2.2で取り上げる。

2.1.「儿」の「er」

「儿」・「耳」・「二」・「而」などのことばを表す音節が「音節をなすr音」(syllabic r) であると，『中国語音韻論』(藤堂明保　江南書院　1957年1月) には主張される。以下の論述でこれらの支持としている。

これらの音節を耳できくと，あいまいな母音〔ə〕が始にきこえて，そのあとにわりあいマサツの少ないrの音がきこえる。しかし発音する側から観測すると，最初から舌尖は硬口蓋の近くまでそりかえっており，そのままの態勢でさいごまで声が流れているのである。そり舌の程度がかなり著しいから，舌尖と上あごとのマサツが減じて，母音的なこえが流れでるために，まるで〔ər〕のようにきこえるのであって，じつは始から終りまで一貫したそり舌の〔r〕が持続しているにすぎない。

声母も/r/、韻母も/r/で、音節を成すわけであるから、私は 'syllabic r' というものを/rr/と標記するのが，いちばん適切であると思う。

P38 (注：引用時，漢字の表記は現行にした。以下は同じ)

2.2.「er」の「儿」

さらに，『中国語音韻論』には「r化韻母」の項目で，「12」の細目で以下のように論述されている。(P49・P50)

その/-r/は，決して音節を構成するものではないから，r化によって，二音節化することは絶体にない。例：

孤儿は/haj/→/har/であり、 /haj-ər/でない。

猴儿は/həw/→/həwr/であり、 /həw-ər/でない。

銭儿は/cjan/→/cjar/であり、 /cjan-ər/でない。

いったい語尾のr化は，近世の北京を中心とする官話方言内に起った現象で，明清の白話小説では，r化した語を表すのに「儿」という漢字をあ

てた。そのために，従来の文法学者，たとえば黎錦熙，王力などの諸氏は，かつてこれを二音節語だと誤認し，r化によって，近代官話に多くの復音節語が加わったと考えたが，これは大きな誤である。

この上で，続く以下のように更に，物理的実験によって論述している。

この事実は，また物理的実験によっても，たしかめることがでさる。北京語には，「～子」「～頭」のような接尾辞を伴った二音節語があるが，それとr化した語とを比較してみよう。次表は故小幡重一博士の創案された機械によって，倉石武四郎博士の実験せられたデータを採ったものである。

声調	r化した語	長さ(秒)	～子のつく語 ～頭	長さ（秒）
1	花 儿	0.47	麻 子	0.51
2	皮 儿	0.38	房 子	0.49
3			椅 子	0.68
3			裏 頭	0.54
4	味 儿	0.41		

この機械では，音の高さと強さとを同時に記録できるのであるが，「～子」，「～頭」のつく語では，その写真映像に核がふたつ現れる。これにたいして，r化した語には，核は一つしか現われない。同様に「鶏（0. 26秒）－子儿（0. 31）」秒の如きは，二部分に分れて，核が二つできる。それは明らかに3音節ではなくて，2音節なのである。従って音韻論的には，「花儿」は1モラ（mora），「鶏子儿」は2モラ（mora）と解釈すべきである。

上記の説明により，「r化とは，語尾の/-j/ /-n/或いは/-ゼロ/が/-r/と交代し，或いは韻尾の/-w/ /-ŋ/が複合韻尾/-wr/ /-ŋr/などを構成する現象をさすこと」(P49) もまた明白となったと思う。

3.「儿化現象」を支配する音韻規則およぶ制約

3.1. /r/としての音韻表記

そり舌声母のわたり/r/と韻尾〔ər〕とは，共に有声のそり舌音で，しかも一つは声母のわたり，他は韻尾に現れ，「相補分布」(complementary distribution) を示すから，同一音素 (phoneme) /r/の異音 (allophone) と解釈する。2.1.でもふれたように，韻尾の〔ər〕に短い〔ə〕がきこえるのは，主母音から韻尾そり舌音への「わたり」である。ここで仮に，音韻表記として/r/を用いて論を進めていく。

3.2.「儿化現象」を支配する音韻規則

ここで，『中国語音声学概論』における「儿化現象」ついて，網羅してみると下記のようになる。

① 韻尾がa，o，e，u，の時
② 韻尾がi，ü，でともに主要元音である時
③ 韻尾がi，nでともに主要元音でない時
④ 韻母がin，ünでともにiとüが主要元音の時
⑤ 韻尾がngである時
⑥ 空韻の時
⑦ 重畳式形容詞、副詞の儿化の時

このなか，⑦は①，③，⑤と同一の音韻現象に属すため，解釈の対象から除外する。そして続く，「儿化現象」における音韻派生という過程において，どのような音韻規則が作用しているか，①～⑥を対象に焦点をしぼり，検討を進めていく。

①～⑥の枠組みはあくまでも，ピンイン表記上の便宜な分類でしかならないため，ここでまず音韻的一般韻の韻尾は次の如く整理する。

無尾韻　－ゼロ
有尾類　/－j/　/－n/
　　/－w/　/－ŋ/

こうすることのよって，韻尾のr化した韻母は音韻派生という過程において，/r/はゼロ韻尾と交替
　/r/は/－j/　/－n/と交替

/r/は/－w/　/－ŋ/と交替しない

という規則にしたがって，以下に如く音韻出力が得ると解釈できる。

/r/はゼロ韻尾と交替の時

/a/＋/r/→/ar/

/ə/＋/r/→/ər/

/i/＋/r/→/ir/

/wi/＋/r/→/wir/

/r/は/－j/　/－n/と交替

/aj/＋/r/→/ar/

/əj/＋/r/→/ər/

/an/＋/r/→/ar/

/ən/＋/r/→/ər/

/wən/＋/r/→/wər/

/jan/＋/r/→/jar/

/r/は/－w/　/－ŋ/と交替しない

/aw/＋/r/→/awr/

/əw/＋/r/→/əwr/

/aŋ/＋/r/→/aŋr/

/əŋ/＋/r/→/əŋr/

/wəŋ/＋/r/→/wəŋr/

3．3．「儿化現象」を支配する音韻制約

韻尾に現れる音韻には，そり舌音/r/がついている場合，r化韻尾を構成する。いまそれを図示すると次の如くなる。

r化韻尾

－r（ar・ərなど）	－r（ar・ərなど）
－wr（awr・əwrなど）	－ŋr（aŋr・əŋrなど）

即ち一般韻においては，半母音の/－j・－w/二つに対して，鼻音/－n・－ŋ/の二つがある。そしてr化した場合には，/－j/と/－n/とは，/－r/となり，/－w/と/－ŋ/とは，/－wr/と/－ŋr/となる。それはなぜかと考えてみると，/－j/と/－n/とは一般に舌面性を帯びている。ところが/－r/は「そり舌的」であるから，両者は根本的に相容れない。いわゆる分節素構造制約（segment structure constraints）作用の結果だといえる。そ

こで韻尾がｒ化すれば，当然いままでの韻尾/－ｊ/と/－ｎ/などは姿を消すのである。ところが他方の韻尾/－ｗ/と/－ŋ/は，舌面性を帯びていないため，したがって韻尾がｒ化しても，別に支障を生ずることなく，そのまま保たれるのである。

４．おわりに

本稿では以上，「儿化現象」において当該現象の音韻派生という過程における音韻規則および制約を生成音韻論の観点より考察してきた。

最後に，本稿でふれる余裕のなかった当該現象の音韻規則および制約の理論的解析アプローチにつき，今後の課題として言及しておきたい。そして，本稿での「er」は「母音」であるか否か，分析の不徹底的さにつき，およびそれの素性指定も含め，次の課題である。